

町内会防災通信(No. 3)

2021年1月
大平山丸山町内会 防災部

昨年5月に「大震災に備えましょう」を皆様にお配りして、電気・ガス・上下水道などが復旧するまでの1週間分として備蓄が必要なものをご案内しました。中でも「在宅避難生活」で直ちに支障が出るのは断水、特にトイレと飲用水です。今回は特に断水時の対策について、具体的な商品の使い方等を含めてご紹介いたします。
あわせて、阪神・淡路大震災を経験された有坂誠道さまの経験談をご紹介します。

＜断水時トイレ対策＞

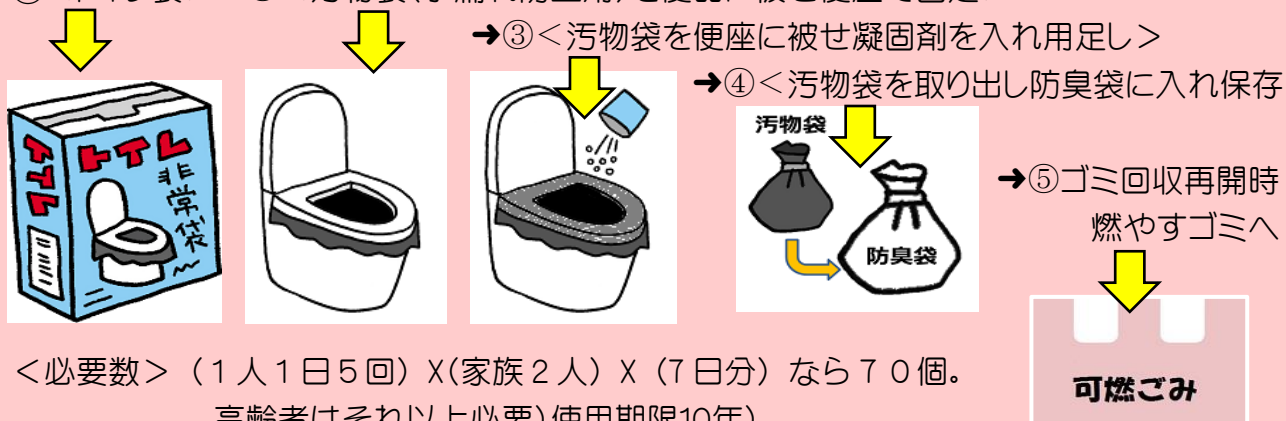


1. 「非飲用水」があれば当座の役に立ちます。
 - ・バスタブ内の水（湯）は入れ替えの直前まで貯めおく。
 - ・鉢植えの木・花等にやる水を多数のペットボトルに入れて庭で保存する。
(シャワー式トイレは断水かつ停電時の操作を前もって説明書で要確認)

2. 「非常用トイレ袋」は流す水がないときに役立ちます。

＜使い方＞ 便器にかぶせ、凝固剤を入れて用足し、防臭袋に入れて、
ゴミ回収再開時、燃やすごみとして出す。

①＜トイレ袋＞→②＜汚物袋(水濡れ防止用)を便器に被せ便座で固定＞



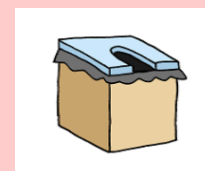
＜必要数＞ (1人1日5回) X(家族2人) X (7日分) なら70個。
高齢者はそれ以上必要) 使用期限10年)

＜商品名・内容・価格＞ (価格は調査時点のものです。購入時はご確認ください。以下同様)

クリロン化成 BOS (凝固剤、汚物袋、防臭袋)	50セット	5,400円
	100セット	8,640円

3. 「組み立て式簡易トイレ」はトイレが使えないとき(破損など)に役立ちます。

サンコー非常用 簡易トイレ (組立便座)	段ボール製 1,755円 プラスチックタイプ製 6,127円
-------------------------	-----------------------------------



＜断水時の飲用水対策＞ 「給水車」が来てくれるまでには日数がかかります。



1. 「飲用水 (ペットボトル)」の家庭での備蓄が必要です。
2人家族・1週間28リットル以上必要です。(1日1人2リットル強×2人×7日分)

通常のペットボトルの水	24ℓ (2ℓ×12本) 1～2千円 (賞味期限1～2年)
長期保存可能な水	24ℓ (2ℓ×12本) 3千円程度 (保存期限5～7年)

2. 「給水車対策商品」 (給水車は自宅のすぐ近くに来るとは限りません。)

2人1日分の水(4ℓ)は4kg、運ぶには道具が必要です。

キャリーカート	2～5千円
給水袋(10ℓ用×2個)	折り畳み式 1～2千円



★紹介した商品は大型量販店・電気店、インターネット通販などで購入可能。

有坂誠道さま(1D)

阪神・淡路大震災の体験を語る！

<1995年1月17日(火)午前5時46分>

突然の“爆発音”で一瞬に「何だ!？」と飛び起きました(後に、地震の上下動で布団とともに跳ね上がり、畳に落下したときの音だったと知りました)。当時、単身赴任で神戸に勤務しており、叔母(80代)の家の二階の部屋で起居していました(神戸市東端の東灘区岡本の戸建て住宅地)。叔母が無事であることを確認したあと、寝巻のまま家を飛び出すと、近隣の屋根瓦の家は、一階部分が潰れ平屋状態になり、土塀も倒壊していました。



写真提供神戸市

表に出てきた近所の人たちとともに呆然としていると、裏の家の小学生の娘が「おばあちゃんが下敷きになった」と助けを求めにきたので、すぐにその家に行きました。潰れた一階の隙間の奥で生き埋めになっているようでした。瓦礫を素手で取り除きながら奥に進むと“手”が見えました。そのとき突然ギシギシという音とともに崩落が起こり、自分も全身が埋まり、動けなくなりました(足首だけは外に出ていたようです)。助けを求めて声を出しても粉塵が辺りにたちこめて、外に聞こえているかどうかはわかりません。どのくらい時間が経ったのか(後に考えると40分ぐらいだったと思われます)、自分と老婦人は瓦礫から助け出されました。老婦人は雨戸を担架代わりにして病院に運ばれました。助けてくれたのは近くの甲南大学の学生たちでした。

私は土砂だらけになりながらも幸い擦り傷程度でしたので、ほとんど破損がなかった叔母の宅に戻りました。電気、ガス、水道はすべて止まっていました。

<三日目からの十一日間>

当日17日から19日の丸三日間は“完全自給”の状態でした。食料は冷蔵庫などにあったもので何とか凌ぐことができました。冬なので腐敗の心配はなかったのは“幸運”でした。

水は、叔母が風呂(200リットル)をいつも一杯にしていたので、トイレの流し用、洗面・歯磨き用などに使うことができました。容器での飲料の確保とともに、水の大切さを痛感しました。

三日目(19日)の夕方、町内に給水車(以降、毎日)がきました。ヤカン、鍋、バケツなどを使って風呂に貯めました。この日に停電が終わったのはその後の震災に比べ“幸運”でした。

四日目(20日)には支援物資の食糧(乾パンや菓子パンなど)が届きました(以降、毎日)。水道とガスが回復する1月下旬までの二週間、給水車と支援物資に頼る生活が続きました。

ただ、下水管の破損や逆流がなかったため、水さえあればトイレから汚物を流すことができたことは“幸運”でした。中高層の集合住宅ではそうはいかなかったようで、建物の前の路上には、次第に紙などに包まれた汚物が置かれたとのことでした。

「大震災への備え」となるキーワードは“水の確保”と“隣近所との日頃のお付き合い”です！！

インタビュー担当 小林淳さま(1D)